

第4期宇治市生涯学習審議会 第12回審議会

会議名	第4期宇治市生涯学習審議会 第12回審議会
日時	平成23年4月18日(月)午前10時から12時
場所	宇治市生涯学習センター 2階 一般研修室
出席者	(委員) 森川 知史 委員長、杉本 厚夫 委員長職務代理、奥西 隆三 委員、門脇 洋子 委員、迫 きよみ 委員、向山 ひろ子 委員、弓指 義弘 委員、渡辺 孝明 委員、坂田 耕作 委員、清水 桂子 委員、古川 彩 委員、俣野 良子 委員、吉田 隆 委員六嶋 由美子 委員
	(事務局) 澤畑 信広 教育部次長兼生涯学習センター所長、安達 昌子 生涯学習課主幹、久泉 昭人 生涯学習課主幹、上野 映子 生涯学習課生涯学習係長、原 常能 生涯学習課生涯スポーツ係長、谷 泰明 生涯学習課事業係長、西田 知世 生涯学習課主事、佐野 雅俊 生涯学習課主事
	(傍聴者) なし
<p>前回の会議録について、委員からの意見が特になかったため、公開することとなった。</p> <p>開会のあいさつ (委員長) 本来は報告書を作成することになっていたが、私の方でまとめられていない。 東日本大震災のドキュメンタリー番組で、役所自体が被災した混乱の中、地域の方々が自治組織を作り、その中からリーダーが生まれてくる場面を見た。この二年間、議論を重ねてきたが、コミュニケーションというのはまさに、人と人をどうつないでいくかという問題である。特に、人を束ねる中心となる方のコミュニケーションについては、我々としても注目していかなければならない。悲惨な状況下で、色々な問題を抱えた方がいる中で見えてくるものがある。社会教育に関わる我々にとっても、どのように支援をしていくのか考えていかなければならない。</p> <p>(1) 報告事項</p>	

第4期宇治市生涯学習審議会 第12回審議会

平成23年度宇治市教育委員会の体制について

事務局から、平成23年度の変更点を説明した。

組織全体については、2箇所の変更があった。学校教育部門では、小中一貫教育課に一貫校開校準備係が新設された。平成24年度からの小中一貫校の開設を、臨時的に行う。生涯学習部門では、源氏物語ミュージアムに企画管理係が新設された。施設の維持管理・運営・企画を行う。従来に係がない状態で管理職2名・一般職2名から、業務執行体制の見直しに伴い、歴史資料館と同じ一課一系の体制をとることになった。職員の増減はいずれもない。

(2) 協議事項

・第4期生涯学習審議会報告書について

報告書については、現段階ではまだできていない。「はじめに」の部分と、資料編をお配りした。資料編については、グラフにできるものはしてもらおう。グラフ化しても、それほど特徴的なデータが出ているわけではない。報告書については、提出前に皆様に確認していただく。

今日は資料を見ながら、この二年間コミュニケーションについて議論をしたことによって気づいた点を聞かせてほしい。最終的には提言をまとめなければならない。テーマの性質上、提言に具体的なことを書き込むことは難しいが、皆様の意見を反映させていきたいと考えている。

(委員長職務代理)

東日本大震災により、災害下での電子メディアによるコミュニケーションの無力さを感じた。被災地に行けないことを考えると安否確認などができるのは良いが、逆に連絡が取れないからこそ苛立つ面はある。

また、避難者は互いに同じ空間で生活をするため、普段よりもかなり多くのコミュニケーションをとったのではないだろうか。今回の被災地は、地域のコミュニケーションが普段から活発にできている所かと思う。もし大都会で起きていたら、普段していないことをすることになり、もっと混乱していたのではないだろうか。そういう意味では、社会教育においてどのようにコミュニケーション能力を高めていくのか、考えていくことが必要である。

(委員長)

電子メディアについてはアンケートの中にも項目があったが、特にツイッターなど思った以上に力を発揮した事例もあり、神戸の震災ではなかった点として注目された。

(委員)

ツイッターについて、端末は携帯電話か。

(委員長)

携帯電話でもパソコンでも使用できる。ツイッターではお互いにフォローしている・されている状況がわかるため、今現在その情報を伝えて、

第4期宇治市生涯学習審議会 第12回審議会

動かしてくれる人は誰かということがわかる。一人ではできないが、電子メディアによってつながりを持ち、全体で調整しながら力を合わせて支援につなげることができたと報告されている。

(委員長)

マスコミの情報は遅れるが、その瞬間の情報が個人に広がり、その人達がつながって協力できたことが最も大きかったようだ。

(委員)

コミュニケーションとは能力であり、能力が高い・低いという言い方になるのか。コミュニケーション能力が高いというのは、どのようなありようだと考えるか。

今回の被災地は農村部であり、都市部であればもっと混乱していただろうという意見があったが、農村部の方はコミュニケーション能力が高いのか、それとも農村部においては人間関係における共同体的要素が色濃く残っており、それが「コミュニケーション能力が高い」と言うのか、また違った言い方があるのか。どのように考えているか。

(委員長)

コミュニケーション能力が高いか低いかという問題とは別に、かつての日本社会は、人と人とのつながりが濃厚な社会を持っていたが、都会化が進んでそれが薄れているという現象が広まっている。かつてのように戻すことはできないため、現代社会の中でどのように人とつながっていくかということがテーマだと思う。そのように考えると、少しでもコミュニケーション能力を高めていくことを考えなければならない時代になってしまったということになる。

その問題を議論するため、私自身が研究してきたことについてお話し、まずは委員にコミュニケーション能力についての理解を深めてもらったうえで考えを聞き、それができたら、今度はそれを社会教育にどう広げていくのか、ということについて考えることができたのではないかと反省している。

(委員職務代理)

コミュニケーション能力というのは、人とつながっていきたいと思う能力だと思う。都市生活の中では人とのつながりを面倒に感じるような社会が出来上がっていたように思うが、東日本大震災をきっかけに、人とのつながりの大切さに気づいたのではないだろうか。今回、これだけ多くの方が犠牲にならなければ気づけなかったが、社会教育としては、もっと早くそのことに気づけるよう進めていかなければならなかった。

(委員)

人と人とのコミュニケーションが良い状態になるようなものとして、コミュニケーションスキルが開発されたと考えてよいか。

第4期宇治市生涯学習審議会 第12回審議会

(委員長)

私はコミュニケーションを扱うときに、記号論をベースに置いている。言語とは記号で、記号化するということは言葉に置き換えをすることである。我々は幼児の頃に、言葉によって世界を認識するようになってしまったため、原初的には、単純に言葉に置き換えられないようなものに取り囲まれており、そういうものによって生かされている部分があるということを見落としてしまう。コミュニケーションを図りたいと思うとき、言葉によってコミュニケーションを図ると勘違いする。

最近よくコミュニケーションが足りないと言われがちだが、それはどこまでも言葉の問題であり、実際には言葉よりも前の問題だと思う。他者が言葉にならずに抱えているものをどれだけ掴み取れるか、そういったものの総合がコミュニケーション能力と言われるものと言える。コミュニケーションについて理解を深めると言ったのはそういう意味である。

(委員長職務代理)

コミュニケーションスキルは飽くまで手段であり、飽くまでその人と伝えたい・話したい・つながりたいと思うことが、コミュニケーション能力としては大切だと感じる。

(委員)

東日本大震災をきっかけに、被災地の方々は不便な生活を強いられ、人と人とのつながりの大切さを感じたことと思うが、便利な生活をしている我々も、人と人とのつながりについて考えなければならないということを、学校や地域で提案していくことが必要だと思う。

(委員)

コミュニケーションは、自分の思いをいかにうまく伝えるか、相手の言いたいことをいかに正確に汲み取るかという道具だと思う。しかし、道具だけでは心が伝わらないため、認知が重要になってくるかと思う。話すことが必要だと思う人は話すが、そうでない人には話をするに意味がない。必要に駆られて話すが、自分のことを人に知ってもらう必要はないと思う人もいる。また、隣に住んでいる人と喋らなくても生活ができる現代社会の中で、コミュニケーション能力を高めて社会とのつながりを持つことは、難しいことだと感じる。

(委員)

町内会でも最近は誰も発言せず、役職も順番で回ってくるので、仕方なくやっている人がいる。そのような形式的な組織が多いのではないかと思うが、意見を言って話し合いをすれば人間関係もより深まる。そういった「おせっかいやき」が地域や組織により多くいたら、もっとうまくコミュニケーションをしていけるのではないかと思う。

(委員長職務代理)

第4期宇治市生涯学習審議会 第12回審議会

「見て見ぬふりをする社会からおせっかいな社会へ」というのが、今回の全国大会のテーマである。見て見ぬふりをする社会というのは、人と離れていくということで、「おせっかいをやく」というのは、人とつながっていくということ。例えば、ある人とある人がつながっていなければ、そこに社会教育員が入って、つないでいくという役割で、おせっかいをやいた人たちがつながっていくことが必要なのだと思う。

東日本大震災の後、子どものケアについて話をする機会があり、4つ挙げた。

災害で孤児となった子どもが大勢いる中、社会的な親となり、子どもを一人にさせないことが大切である。

子どもたちの心の傷が消えるには、被災しても学校へ行くなど、早く普段の規則正しい生活に戻ることが必要である。

避難所では水を汲んでくる、高齢者の方に食糧を配る等、一人一役をさせる。

体を使った遊びをさせる。

社会的な親が子どもたちを見て、規則正しい生活の環境を整え、一人一役を与えることによって、学校や家庭等の社会の中に自分の居場所を持たせる。さらに遊ぶことによって人と人とのコミュニケーションがつながっていく。こういったことが子どもを元気にし、社会を元気にしていく。当たり前なことだが、今回の震災を受けて、人と人とがどうつながっていくのかという全国大会のテーマの意味がさらに明らかになったかと思う。

(委員長)

おせっかいやきは社会的な親であり、子どもをどう育てるかという問題ともリンクしている。そういった意味では、社会的親の役割は非常に大きい。話がつながったように思う。

(委員)

町内会がなくなっているという問題がある。新興住宅地のように、町内自体が出来上がらない所もある。本当は「おせっかいやき」だが、まだ知られていない人たちをいかに発掘するのかということも大切である。

(委員)

確かにそうだと思う。最近、新しく町内に入ってきた若い人たちの中にも、地域の人たちと交わりたいとは思っていても、自分から進んでやるような感じではない人たちもいる。

・第53回全国社会教育研究大会京都大会について

お配りしたのは、3月の山城地区実行委員会の資料の一部である。山城地区実行委員会内で役割分担をすることになっており、3ページのとおり、宇治市は総務部(総務係・庶務係)の担当に決定した。各専門部の具体的な活動については、山城教育局が案を作った上で、各専門部で

第4期宇治市生涯学習審議会 第12回審議会

調整を行う。

最後のページに、文化センターの大まかなイメージを示している。物産品コーナーは屋外にテントを立てて、ポスターセッションについてはリハーサル室（文化センター）、展示集会室、第一会議室（中央公民館）で行いたいと考えている。

物産品コーナーは山城教育局と広域振興局が調整していく。今後は広域振興局を交えるかたちで山城南部の物産品コーナーの設営を考えていきたいということで、先日山城教育局の担当が商工会議所に挨拶にみえた。3月には商工会議所の会頭に、3月末には総会において全会員に、大会の趣旨について説明した。現在、東日本大震災に対する義援金活動が最優先になっているが、5月末ということで企業に声掛けをしているので、順次市教委もしくは府教委に直接企業からの申し出があるかと思う。現在、30件弱の企業もしくは個人の協賛の申出を受けている。確実に本大会の趣旨が広まってきていると言える。

今週の木曜日には、京都府の実行委員会が開催される。新たな情報が入り次第また伝える。それを受けて、5月13日には山城地区実行委員会も開催される。

(3) その他

(委員長職務代理)

京都府社会教育委員連絡協議会総会について、今回は役員改選と規約改正が行われる。また、パネルディスカッションというかたちで、現在の各地区の準備の進捗状況について話し合いたいと考えているので、多くの方に参加してほしい。

< 次回の会議について >

未定